

芸術の力で国を変えよう！

さわ かず き
澤 和 樹

ヴァイオリニスト
東京藝術大学長



©Kenshu Shintsubo

2年にも及ぶ新型コロナとの戦いの中で、「こんなはずじゃなかった日本！」と思われることが、多々あったのではないのでしょうか？ 奇跡といわれた戦後の高度成長期を経て世界第2位の経済大国として君臨し、日本製の車や電気製品はクオリティやコストパフォーマンスで他の追従を許さないものでしたし、国民皆保険制度のもと誰もが世界最高水準の医療が受けられる……、そういう日本に誇りを持っていました。

ところが、新型コロナの世界的な大流行という文字通り100年に一度の非常事態の中、進まないPCR検査やワクチン接種予約の混乱、ワクチンや治療薬の自国での開発・認可の遅れ、何度も繰り返される「緊急事態宣言」の発出と延長などなど。日本人特有の清潔さや規律正しさのお蔭か、欧米とは比較にならない少ない感染者数ながら、世界最高水準と信じていた医療の逼迫が連日報道されるなど、平時には機能していた様々な社会的ファンクションが、想定外の事態には全く機能しないという弱点をさらけだしました。

芸術教育に携わるものとして、自戒を込めて考えるに、日本は戦後の経済的発展を遂げる中で、教育や芸術への投資を怠って来たことは明らかです。1964年、前回の東京オリンピックが開催された年に日本がOECD（経済協力開発機構）に加盟し、事実上先進国の仲間入りを果たしました。日本のOECDへの拠出額は現在も上位にあり、存在感を保っていますが、教育に対する公的支出の対GDP比率は加盟国中ほぼ最下位です。芸術への公的支出という点でもOECD平均をはるかに下回っており、韓国やフランスには大きく水をあけられています。

小中高校での芸術教育は、科学技術振興の名のもとに理数系と英語教育の充実が図られたあおりで、美術

や音楽、書道といった芸術系科目は過去30年で約30%がカットされ、子供たちが優れた芸術に触れる機会が明らかに減っています。さらに1990年に大学入試センター試験が導入され、マークシートによる択一回答となったため、知識詰め込みが主流となり、芸術教育が得意とする多様な考え方を容認し、育むという傾向が希薄になってしまいました。

超少子高齢化社会に突入している日本は、医療費や福祉関連費用が大きく国家財政を圧迫しています。先日、アルツハイマー型認知症の治療薬が世界で初めて承認されたというニュースがありました。朗報ではありますが、新薬開発には数千億円といった開発費が投入されており、現時点でこの治療薬を使うと年間600万円ほどがかかるともいわれています。今後、日本でも承認され、保険適用となった時の国の負担はどれほどでしょうか？ 一方で、日本ではまだまだ進んでいない音楽療法や芸術療法があります。この分野の先進国アメリカでは、ある種の認知症治療や予防には薬物よりも高い効果が期待されているそうです。

日本にはいまだに文化省はなく、文化庁は文部科学省の一外局にすぎません。予算規模は韓国のわずか9分の1です。第2次世界大戦では東京・大阪などの都市への空襲、最終的には広島・長崎への原爆投下という悲劇で幕を閉じることになってしまいましたが、この戦争で本格的な爆撃を逃れたのが奈良・京都・鎌倉・金沢といった歴史や文化財の残る街でした。芸術や文化の力が、防衛にも貢献できる証ではないでしょうか？ 文化庁を文化省に格上げして、日本の持つ文化力を高めることで、諸外国から尊敬され、大切にされる国になることが急務ではないかと思えます。



私の音楽人生と東響、交響楽振興財団

かな やま しげ と
金山 茂 人

公益財団法人 東京交響楽団 最高顧問 評議員長
公益社団法人 日本オーケストラ連盟 副理事長

私がヴァイオリン奏者として東京交響楽団で演奏していた頃も含めて、交響楽振興財団には何かとお世話になった。当時事務局長だった越村貞直さんには随分叱られ、若かった私はすごく鍛えられた。交響楽振興財団は、うるおいのある、よりよい社会を実現するには、経済だけでなく文化芸術も大切にしなければならないという考えから、経団連が設立した団体だと聞いているが、経団連出身の越村さんはその立ち上げから関係されていたという。越村さんは戦前中国に行っていて、噂によると「馬賊」だったという人もいます。そういわれても不思議ではない、迫力のある人だった。しかし、事務所が閉まる午後5時になると、人が変わったように「好好爺」になるから一層不思議だった。たまたまその時間に居合わせると、「お、金山くん、ちょっと付き合えや」といって、行きつけの蕎麦屋で飲み始める呑兵衛だった。そこでは仕事の話は一際しない、これまた不思議な人だった。

私は昭和15年2月、富山県立山村生まれで、近くには北アルプス立山連峰が聳え立っていた。わが家は富山でも有数の大農家で大地主だった。ただし、それも昭和22年の農地改革まで。そもそも好きでもない音楽を私が始めたのは、親父の考えによるものだった。昭和天皇と同じ明治34年（1901年）生まれであることを自慢していた父は、音楽好きでヴァイオリンを好んだ。音楽で身を立てたいと考えたのか、上京して早稲田大学に通学しつつ、東京音楽大学の前身である東洋音楽学校にも通ったらしい。ところが、とても優秀だが一方すごい道楽者であった長男が借金をするだけして、昭和4年横浜港からアメリカに行ってしまった。

その結果、次男である父が家を継ぐことになり、音楽の道を断念。父の夢は末子の僕に託された。当時僕は桁外れの腕白で、手を焼いた父は自らヴァイオリンを教えようと思ったらしい。かといって軟弱な男にし

たくなかったのか、柔道場にも通わせた。高校入学後すぐに柔道部に入り、2段の実力者となった。2段免許書授与の際、大学の柔道部から3段の猛者が来て模範試合をやったが、私が払い腰で勝ってしまった。免許は2段だが、実力は3段だと思っている。

高校は名門進学校で、勉学と音楽の両立は無理だと考えた父は、思い切って私を上京させ、音楽の道に進ませようと決断した。昭和31年、15歳の時である。東京に出てきた私は、よほど環境に刺激されたのか、あんなに嫌ったヴァイオリンの練習を猛烈にやった。毎日8時間、時には10時間も練習し、国立音楽大学附属高校、大学と進んだ。昭和38年卒業と同時に東京交響楽団（東響）に入団。しかし、東響は翌年財政破綻し、遂には創立楽団長の入水自殺にまで追い込まれた。

東響では13年間ヴァイオリン奏者を務めたが、昭和51年のある日、楽団員総会で代表代行に選任、翌年には代表に推挙された。36歳の時だった。楽団員、事務局総勢約100名の命運が私の肩に預けられた。東響のもっともつらい時期で、設立間もない交響楽振興財団の越村さんや多くの方々に支えてもらった。何か気に障ることがあったのか、演奏会の数日前に越村さんから、「もう東響には演奏させない」と心臓が止まりそうなことを言われたこともあった。しかし、総じて親身に対応していただいた。これは東響だけではなく、他の楽団に対してもそうだったのではないかと思う。

東響は2023年に創立77年を迎える。東響77年の歴史のうち私が楽団長を務めた30年間は、苦しくはあったがさまざまな出会いがあった。充実した音楽人生であった。今日までやってこられたのも、私たちよりもはるかに苦労された先輩諸氏のおかげである。心から感謝申しあげたい。わが国オーケストラの演奏レベルは著しく上がっている。東響をはじめ各オーケストラが世界へ向けて一層羽ばたくことを期待するものである。

「デビュー15年目に思うこと」

ごう こ すなお
郷 古 廉
ヴァイオリニスト



©Hisao Suzuki

2007年のデビューから今年で15年が経つ。現在29年目の人生においてはそれなりにまとまった時間だが、長かったとは思わない。むしろ、気がついたら時間が経過していたという感覚に近い。これを機会に私の人間形成上無視することのできない2つの出来事について、書いてみようと思う。

東日本大震災の衝撃

ひとつ目は、2011年3月11日に発生した東日本大震災だ。当時17歳だった私は、その日留学先のウィーンから演奏会のため帰国しており、実家のある宮城県多賀城市にいた。午前中は初春の穏やかな晴天だった。私は父の影響でサイクリングが趣味だったので、その日も午前中には練習を終わらせて、午後から出掛けようという気でいた。父がよく連れて行ってくれた荒浜には、海岸線に沿って素晴らしいサイクリングロードがあり、この天気であればさぞ気持ちが良いだろうと楽しみにしていた。

しかし、正午を回ったところに天気は急変した。北風が強くなり、先ほどまでの青空は暗い雲で覆い尽くされ、程なくして湿った雪が降ってきた。私は予定が狂ってしまったことに悔しさを覚えつつ、母の勧めもありサイクリングを断念し、練習を続けることにした。

すると突然カタカタと物音がし始め、強烈な揺れに何が起きているのか理解できず、頭が真っ白になった。状況もよく分からぬままあつという間に日は沈み、夜中に車のラジオから聞こえてきたニュースは、ちょうどその日に行くつもりであった荒浜に数百もの死体があがっているようだ、というものだった。もしもあの日晴天が続いていたら、雪が降らなかったら、私は助からなかっただろうと思う。

17歳といえば、一般的には漠然とした不安を抱えつつも、生命力に満ち溢れた青春真っ只中だと思う。私も例外ではなかった。自分が生きていること、音楽をやることに意味を見出そう、意味はあるのだと勝手に思い込んでいたのだ。しかし、震災の経験によってそんなものは見事に打ち砕かれた。ああ生きていることに意味があるなんてただの思い上がりだ、と気付いてしまったのだ。生と死の境界線が曖昧に

なって、全てが虚しく無意味に感じた。生きることは自分の限りある時間に意味を「与える」ことだ、もっと楽しまなければ、とポジティブに考えられるようになるまでには随分時間がかかった。震災を経験して良かったとは全く思っていない。経験しない方が良いに決まっている。しかし、心底嫌になるまで自分の内面と向き合った数年間は、かけがえのない財産だと思っている。

パンデミックに直面して

ふたつ目は、新型コロナウイルスのパンデミックだ。これは今もなお世界を支配しているので、単に「出来事」と呼ぶには相応しくないかもしれない。震災の影響は局地的であったのに対し、コロナは世界中の人間が影響を受けている訳だから、事態はより複雑かと思う。言うまでもなく、人を大勢集めてコンサートをすることが主な仕事である音楽家も、大打撃を受けている。コンサートの中止が相次ぐなか、実際に「生活の役に立たない」文化芸術の存続が危ぶまれ、多くの芸術家や芸術団体が支援を呼びかけていた。

それは至極当然のことなのだが、私はこの状況に違和感を持った。好きで芸術を生業にしている人間が、「芸術（音楽）は人生を豊かにする生活に必要なものだ」と訴えることは、何かおかしい。もし本当に必要であるのなら、市民たちが訴えるべきことであって、提供する側が言うことではないはずなのだ。ここで考えなければならないのは、我々はこのような危機において、応援しようと思ってもらえるほどの価値をこれまで提供してきたのだろうかということだ。ホールに足を運んでもらえることが当たり前、拍手をしてもらえることが当たり前になってはいなかったか。真に質の高いものを表現してきたのか。そして何より、世代を超えた未来への持続可能性をも視野に入れて活動してきたのか。これら全ての問いに対し、自信を持って首を縦に振ることのできる人間がどれだけいるのだろうか。

しかし、明らかになったのはネガティブなことばかりではない。コロナ禍では無観客配信コンサートが数多く開催された。現在演奏会はそのほとんどが100%の収容人数で開催されているが、同時にインターネット配信を行う場合

次ページへ

→新潟市の北区フィルハーモニー管弦楽団と石巻市民交響楽団ともども予定した演奏会すべてを開催した。

コロナ禍の演奏会であったため、演奏会場においては感染状況を勘案しながら入場者数を調整するとともに、入口での検温、手指のアルコール消毒を徹底するなど、今年度も感染防止を最優先し、万全の態勢で演奏会を開催した。

多彩な独奏者が出演

2021年度も才能豊かな独奏者が数多く出演した。ピアノでは、リストのピアノ協奏曲2曲を演奏した金子三勇士さん、ラフマニノフの3番を弾いた阪田知樹さん、モーツァルトの20番を指揮・ピアノ演奏した渡邊一正さん、ショパンの1番を弾いた小林愛実さん、同じくショパンの1番を演奏した務川慧悟さん、ラフマニノフの2番の上原彩子さん、同じくラフマニノフ2番の松田華音さんと、人気と実力を兼ね備えた一流奏者たちの演奏を聴くことができた。

2021年のコンクールに限れば、小林愛実さんは10月に行われたショパン国際ピアノコンクールで4位に入賞したばかりで、伊豆での公演は凱旋演奏となった。チケットは即完売となったが、コロナ禍のため入場者数を絞らざるをえなかったのは残念であった。務川慧悟さんと阪田知樹さんは、世界3大音楽コンクールのひとつ「エリザベート王妃国際音楽コンクール」(5月)でそれぞれ3位と4位入賞を果たし、彼らの演奏を聴くために遠方から足を運んだ熱心なファンが見られた。

ピアノ以外では、ヴァイオリンの木嶋真優さん、大谷康子さん、佐藤まどかさん、松田理奈さん、チェロの宮田大さん、ホルンの田中沙弥さん、ギターの大萩康司さんが出演し、いずれも素晴らしい演奏で聴衆を魅了した。

“心の糧”としてのコンサート

コロナ禍のなかでの演奏会であったが、来場者からは演奏会に対する熱い思いが多く寄せられた。アンケート等の意見を要約すると、「コロナで社会全体が閉塞感に覆われている。演奏会に足を運び、みんなと生の演奏を聴くと感動が共有できる。社会とつながっていることを実感できる。コンサートはまさに心の糧だ。困難な時期だが、演奏会をつづけてほしい」。

巡回公演とアマチュアオーケストラ演奏会を実施するにあたっては、今年度も公益財団法人JKAから全面的なご支援を受けた。厚いご支援に感謝申しあげるとともに、演奏活動を通じて「心の糧」を広く提供できるよう努めていきたいと考えている。

演奏活動の詳細については、当財団のホームページを参照していただきたい。

巡回公演 http://www.symphony.or.jp/i_annai_2021_001.html

アマチュアオーケストラ

http://www.symphony.or.jp/iv_annai_2021_001.html

2021年度 青少年の健やかな成長を育む活動 補助事業 (公益財団法人JKA 競輪公益資金 補助事業)

[巡回公演]

開催地	出演者
奈良県 大和高田市	7/17 大阪交響楽団 指揮 大井剛史
茨城県 日立市	10/3 読売日本交響楽団 指揮 藤岡幸夫、ヴァイオリン 木嶋真優
長野県 岡谷市	10/10 新日本フィルハーモニー交響楽団 指揮 飯森範親、ピアノ 阪田知樹
愛媛県 四国中央市	10/17 瀬戸フィルハーモニー交響楽団 指揮 松岡究、ヴァイオリン 佐藤まどか
和歌山県 有田市	10/24 大阪交響楽団 指揮 渡邊一正、ヴァイオリン 大谷康子
静岡県 伊豆の国市	11/27 東京フィルハーモニー交響楽団 指揮 角田鋼亮、ピアノ 小林愛実 ギター 大萩康司
千葉県 松戸市	12/19 東京21世紀管弦楽団 指揮 浮ヶ谷孝夫、ピアノ 務川慧悟
長野市	12/25 東京交響楽団 指揮 梅田俊明、ホルン 田中沙弥 ソプラノ 西本真子、メゾソプラノ 金子美香 テノール 糸賀修平、バリトン 近藤圭
山形市	2022年 1/30 山形交響楽団 指揮 大井剛史、チェロ 宮田大 ヴァイオリン 松田理奈、ピアノ 上原彩子
滋賀県 野洲市	1/30 関西フィルハーモニー管弦楽団 指揮 藤岡幸夫
愛知県 豊橋市	2/5 大阪フィルハーモニー交響楽団 指揮 沼尻竜典、ピアノ 松田華音
岐阜県 飛騨市 →中止	2/19 東京フィルハーモニー交響楽団 指揮 角田鋼亮、語り 坂本美雨

※楽器演奏クリニックは実施できず

[アマチュアオーケストラの演奏活動]

開催地	出演者
新潟市 北区	6/27 北区フィルハーモニー管弦楽団 指揮 長谷川正規
愛知県 名古屋市	7/18 フィルハーモニカー・ウィーン・名古屋 指揮 茂木大輔
埼玉県 さいたま市	8/8 浦和ユースオーケストラ 指揮 大浦智弘
宮城県 石巻市	10/24 石巻市民交響楽団 指揮 佐藤寿一
滋賀県 大津市	11/7 大津管弦楽団 指揮 山川すみ男

2021年度 日本交響楽振興財団 事業

開催地	出演者
大阪府 高槻市	2022年 2/27 オーケストラ・リガール (アマチュアオーケストラ公演) 指揮 岡本陸、独唱 山田美樹

※特別支援学校オーケストラコンサートは実施できず



岡谷カノラホール

ロビー内には、公演開催記念コーナーが設置され、盾には以下のように記されている。
「新型コロナウイルスの猛威が未だ続く中、本公演は徹底した感染予防対策を施したうえで、徐々に客席の定員を100%に設定して行われた。舞台は昨年に引き続き、奏者の安全を確保するためにオーケストラピットをステージ面と同じ高さに設置した。プログラムは、アメリカにゆかりのある作品が選曲された。(中略)スケールの大きな演奏で聴衆を魅了した。なお、本公演は競輪の補助を受けて開催した。」



コロナ禍におけるホールの運営について

おおにし かつし
大西 克 至
しこちゅ〜ホール館長

四国中央市は愛媛県の東部、四国の高速道路の中央結節点に位置する、人口約8万3千人の市であります。市街地が瀬戸内海に面し、^{ほうおう}法皇山脈と四国山地との間に吉野川支流の銅山川を有して、街・海・山と多様な表情をもっています。また、愛媛県・四国地方を代表する工業都市のひとつであり、日本有数の製紙産業地帯でもあります。昨年10月にノーベル物理学賞を受賞した「真鍋淑郎博士の生まれ故郷である四国中央市」と説明したほうが分かりやすいでしょうか。

四国中央市市民文化ホール（しこちゅ〜ホール）は平成31年4月に竣工、約4カ月の開館準備期間を経て令和元年8月23日に開館いたしました。「しこちゅ〜ホール」という名前は新しいホールの誕生を記念し、一般公募で愛称を募集し決定しました。

管理運営については、長年市職員として培ってきた経験や知識、またこの街ならではの地域の特性を熟知し、豊富な人脈を持つ市職員OBを主体に構成する「NPO法人四国中央市公共施設管理運営センター」が指定管理者としてあたり、「産業と文化が融合し、人を育む、四国のまんなかキャンパスホール」を基本理念とし「人と文化を育てる文化拠点」を目指すとしています。

開館後は開館記念事業として、毎月のようにピアノリサイタル、オーケストラ公演、市内の小中学校や高校の吹奏楽演奏、上方落語、ヤング、アダルト向けのポップス公演を開催、さらには施設見学を希望される団体や自治体の対応に追われて、忙しい日々が続きました。

しかし、翌2年1月頃から新型コロナの影響が徐々に始まり、予定していた開館記念事業のほとんどが中止となりました。その後も新型コロナの影響は続き、施設の一部利用制限をかけたことで、各団体が行う一般利用の事業も、ホールが行う自主事業もほとんどが延期・中止となり、ホール運営が事実上できない時期もありました。

そのような中、今回「瀬戸フィルハーモニー交響楽団しこちゅ〜公演」を日本交響楽振興財団と共催することができました。市内ではオーケストラの人気が高く、開館記念事業として令和元年8月に開催した「陸上自衛隊中部方面音楽隊コンサート」はほぼ満席となりました。しかし、以降予定していた大阪フィルハーモニー交響楽団、陸上自衛隊第14音楽隊のコンサートが相次いで中止となりました。

今回の演奏会は感染防止のため、国・県の方針等を踏まえ、収容率を50%程度とし、市内在住者を優先するという条件での開催でしたが、約2年ぶりのオーケストラ公演であったことや、地元出身のトランペット奏者2人が出演していたこともあって、話題性もあり多くの方に喜んでいただきました。

初めての巡回公演であり、書類作成などの事務作業が大変なのではないかと心配していました。しかし、日本交響楽振興財団や関係者の皆様のおかげでそのようなこともなく、無事に公演を終えることができました。この場を借りて感謝申し上げます。

コロナ終息が見えない状況下で、事業を展開していくことは大変ではありますが、それでもホールとしての活動は継続していかなければなりません。しこちゅ〜ホールでは今後も市民が親しみ、身近な存在として感じてもらうことが大切であり、そのためには公立施設の使命として採算性が低く、集客にも苦勞する演目でも実施していく必要があることを常に意識して、管理運営を行いたいと考えています。



しこちゅ〜公演

音楽は不要不急ではない

こ はま あきら
濱 亨

大津管弦楽団事務局長



2021年11月7日（日）、大津市民会館大ホールにおいて、指揮に山川すみ男先生、ゲストコンサートミストレスに松田美奈子先生を迎え、大津管弦楽団第140回定期演奏会を開催いたしました。

大津管弦楽団は、クラシック音楽を愛好する大津市民によって創設されたアマチュアオーケストラで、1951年の創立以来、年2回の定期演奏会を開催してきました。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、計3回の演奏会が中止となり、今回の演奏会は2年ぶりの開催となりました。70周年を迎え、本来なら盛大な記念演奏会とするはずでしたが、感染対策として、休憩時間なしで1時間程度のプログラム（ファンパーディング：歌劇「ヘンゼルとグレーテル」序曲、ワーグナー：ジークフリート牧歌、ベートーヴェン：交響曲第1番）とし、ロビーコンサートやアンコールも廃しました。

練習では、通常の感染対策（検温、アルコール消毒、ソーシャルディスタンス）に加え、常に二酸化炭素濃度を測定し、換気を徹底しました。また、弦楽器奏者等のマスク着用はもちろんですが、管楽器奏者は楽器先端のベルに「セーフティベルマスク」を装着しました。飛沫拡散を防ぐように不織布でベルを覆うもので、音への影響は極力少なくされていたようですが、奏者はストレスを感じていたようです。管楽器の中でも、

構造上フルートは歌口に吹き込む息の対策が重要であり、「セーフティガード」を着用しました。吹き込む息が前方に拡散しないよう、歌口周辺をカバーして飛沫を不織布で受け止めるものです。指揮者にもマスク着用をお願いし、大きな声を出さなくても聞き取れるよう、ピンマイクとスピーカーを導入しました。

それでも、感染状況が厳しくなると、弦楽器と管打楽器を分けて練習したり、合奏練習においても弦楽器を減らすなど、参加人数を調整してクラスター防止に努めました。練習場が短時間制限を受け、思うように練習できない期間もありました。活動を続けていていいのか迷いが生じた時には、いろんなアーティストが発信していた「音楽は不要不急ではない」というメッセージに勇気づけられました。

演奏会では入場者に検温、アルコール消毒を行い、チケット半券に連絡先を記入いただきました。そしてマスクを着用の上、少なくとも1席ずつ空けて座るようお願いしました。誘導スタッフを多めに配置し、退場時は座席の列毎に移動するようアナウンスし、混雑を防ぎました。アンケートはQRコードを配布し、スマホで入力してもらいました。

そうしてなんとか開演までこぎ着けましたが、ホールに自分たちの演奏が響き渡り、それに暖かく力強い拍手で応えていただけた時は、感無量でした。「音楽は不要不急ではない」ということを実感することができました。アンケートでは感謝やねぎらいのコメントを多くいただきましたが、我々の方が励まされました。今後の活動の糧としたいと思います。

まだまだ自粛ムードが漂い、復帰を見合わせている団員も少なくなく、度重なる公演中止による損失も大きかったことから、楽団の運営はかなり厳しいものがあります。こうして日本交響楽振興財団と共催をさせていただけたことは、非常に大きな力添えとなりました。心より感謝申し上げます。

ご支援いただいている団体・企業

団体		
(一社) 信託協会	(一社) 日本建設業連合会	石油連盟
(一社) 日本鉄鋼連盟		ほか
企業		
朝日生命保険(相)	第一生命ホールディングス(株)	東日本旅客鉄道(株)
アサヒグループホールディングス(株)	大成建設(株)	(株)フジテレビジョン
岩谷産業(株)	高砂熱学工業(株)	富士通(株)
ANAホールディングス(株)	武田薬品工業(株)	富士フイルム(株)
ENEOSホールディングス(株)	中外製薬(株)	双葉電子工業(株)
(公財) オリックス宮内財団	(株)TBSテレビ	本田技研工業(株)
王子ホールディングス(株)	(株)電通	前田建設工業(株)
(株)河合楽器製作所	トヨタ自動車(株)	丸紅(株)
キッコーマン(株)	東京海上日動火災保険(株)	三井住友海上火災保険(株)
キヤノン(株)	東京ガス(株)	三井物産(株)
キヤノンマーケティングジャパン(株)	東レ(株)	三井不動産(株)
KDDI(株)	(一財) 凸版印刷三幸会	三菱重工業(株)
三機工業(株)	(株)ニフコ	三菱商事(株)
清水建設(株)	(株)日新	三菱地所(株)
信越化学工業(株)	(株)日清製粉グループ本社	三菱電機(株)
スタインウェイ・ジャパン(株)	日本ガイシ(株)	三菱マテリアル(株)
住友化学(株)	日本製紙(株)	明治安田生命保険(相)
住友商事(株)	日本製鉄(株)	(株)ヤマハミュージックジャパン
住友生命保険(相)	日本生命保険(相)	ユニ・チャーム(株)
住友林業(株)	日本電信電話(株)	(株)龍角散
セイコーホールディングス(株)	野村ホールディングス(株)	ローム(株)
積水化学工業(株)	浜松ホトニクス(株)	
(株)大和証券グループ本社	(株)日立製作所	

編集だより

□今回の巻頭言は東京藝術大学の澤和樹学長にお願いしました。4月からは重責から解放され、演奏活動により多くの時間があてられるようになるとうかがっています。当財団の巡回公演にもぜひ出演していただきたいと思います。

□コロナ禍以前、当財団では毎年明け早々に新年顔合せ会を開催していました。ご寄稿いただいた金山茂人さんや東京フィルの樽松三郎さん、東京交響楽団の山下芳彦さんなど楽団長経験者に各楽団の中堅・若手が入り混じって自由に懇談するこの会合は、世代や楽団の枠を越えた交流拡大の起点となる場でもありました。そこで金山さんが独特の口調で語る体験談を聞くのが楽しみでした。来年こそ新年会ができることを願っています。

□昨年9月12日、飯森範親さん指揮、東京ニューシティ管弦楽団の定期演奏会に郷古廉さんが出演し、アルバン・ベルクのヴァイオリン協奏曲「ある天使の思い出に」を熱演していました。その日の夜、NHK教育テレビの『クラシック音楽館』を見てみると、N響演奏会でコンサートマスター篠崎史紀さんの横でなんと郷古さんが弾いている！郷古さんには独

奏者として巡回公演に何回も出演してもらっていますが、どういことだろうか疑問がわき、それが今回の原稿依頼につながりました。当方の疑問に答えるだけでなく、東日本大震災や新型コロナをめぐっての思いもしたためてくれました。

□巡回公演とアマチュアオーケストラ演奏会については、演奏会の主催者・当事者の立場から、しこちゅ〜ホールの大西克至館長と大津管弦楽団の小濱亨事務局長にご寄稿いただきました。コロナ禍の演奏会ゆえ、感染防止策の徹底ぶりが印象的でした。困難ななか演奏会開催に踏み切っていただいた各地の会館、アマチュアオーケストラの皆様にご敬意を表したいと思います。

□2022年3月1日現在の理事、監事、評議員、顧問は次のとおりです。理事：会長 原良也、専務理事 久保田政一、大谷康子、木村純子、三枝成彰、高松則雄、林寛爾、監事：緑川正博、藤原清明、評議員：海老澤敏、川本裕康、小宮山淳、佐沢英紀、寺西基之、後藤篤樹（新任）、野田暉行、顧問：一柳慧、岩沙弘道、榊原定征、早川茂（敬称略・順不同）

公益財団法人 日本交響楽振興財団

〒101-0047 東京都千代田区内神田3-9-3
 電話 03-3253-2032 FAX 03-3253-0566
 編集・発行人 林寛爾

E-mail nihon@symphony.or.jp
 URL http://www.symphony.or.jp

2022年3月9日発行